



もっと仮説を

正しい学説を提唱しても、すぐに学界で承認されるとは限らない。その典型例がウェーゲナー (Alfred Wegener, 1880-1930) が提唱した大陸移動説である。

世界地図を見ていると、アフリカの西海岸と、これに対する南アメリカの東海岸の凹凸の具合がよく似ている。この両大陸が昔は1つだったのであると思いたくなるが、これを理論化したのがウェーゲナーである。

この人は気象学者であり、大学教授でもあった。グリーンランドの探検に2度も参加している。1912年に大陸移動説を唱え、3年後に「大陸と海洋の成立」という本を書いた。3億年前の石炭紀後期はいまの6大陸が1つであるというパンゲア Pangea もこの本での造語である。

単なる思いつきではない。南米にも有袋類がいること、熱帯特有の珊瑚の化石がカナダの東海岸にあること、地質構造や石炭紀の植物分布がパンゲアを考えるとよく説明できることなど、多くの事実がその裏付けになっている。

大陸移動説は注目を浴びたが、あまりに空想的だとして一度は否定された。この理論が見直されたのは1950年以後である。

古地磁気学がきっかけになった。岩石の自然残留磁気の測定が可能になり、大陸の緯度が変化してきたことが証明された。同じ方法で海底がゆっくり移動していることも判明し、plate tectonics (プレートテクトニクス：地殻構造論) が1969年に造語されることにもなった。ウェーゲナーの提唱から半世紀以上も後のことである。

似たことが眼科にもある。東北大学の桑島治三郎助教授が、昭和34年(1959年)に、日本人にも多発硬化症があることを日本医学会総会で報告した。ちょうど50年前である。しかしこれが定説になったのはごく最近のことなのである。

近視の原因についても、議論がめっきり少なくなった。「LASIKで治せばよい」で済む問題ではないのだ。

加齢黄斑変性が脚光を浴びているが、この疾患は昭和50年(1975年)より以前にはほとんど存在しなかった。「日本人はAMDとは無関係」とすら考えられていたのである。その理由について考えをお持ちの方も多いのではと思う。仮説はどしどし提唱していただきたい。

GEN

